

6. 耐冷性は「トヨスズ」並であるが、熟期が早いので安定性は高い。
7. ダイズシストセンチュウに対する抵抗性はない。
8. 収量性は「トヨスズ」より7%前後劣るが、熟期が早いので安定している。しかし、年次により「トヨスズ」同様、臍部の着色、種皮の亀裂がみられる場合がある。
9. 子実の粗蛋白含量は、「トヨスズ」と同程度でやや高く、粗脂肪含量はやや低い。

栽培適地と奨励態度 本品種は、上川管内および収穫、乾燥時の天候がこれに類似する地帯に適する。これらの地帯の「トヨスズ」、「北見白」、「キタムスメ」の1部におきかえ、さらに早生品種を必要とする地帯に普及する。

草型、子実の形は「トヨスズ」に類似しているが、ダイズシストセンチュウに対しては抵抗性はないので、被害の恐れのある圃場での栽培はさけること。

だいずわい化病、マメシロイガの防除は従来の品種同様に行うこと。

その他の肥培管理は、「トヨスズ」、「北見白」、「キタムスメ」など一般品種の栽培に準じて行えばよい。

試験場所	開花期	成熟期	生育日数	成熟期における				10a 当り		1,000粒重	試験年次
				主茎長	主茎節数	分枝数	着莢数	全重	子実重		
十勝農試	7.22	9.28	133	48.2	11.1	4.7	51.6	479	255	299	1972~1977
北見農試	7.23	9.26	128	52.0	10.9	4.2	57.7	494	238	268	1972~1976
上川農試	7.17	9.20	123	54.0	10.4	5.5	67.0	579	297	308	1972~1977
原原種農場	7.17	9.19	125	40.0	9.7	3.9	46.7	437	252	304	1972~1976
中央農試	7.19	9.28	134	41.0	10.5	4.5	57.9	421	219	295	1973~1974

9. 小豆

(1) 光小豆 (十育7号)

来歴 「光小豆」は、1955年(昭30)に北海道立農業試験場十勝支場において「茶殻早生」を母とし、「早生大粒1号」を父として交配し、以降選抜固定をはかって来たものである。1941年(昭36)より「十育7号」の系統名で生産力検定試験に供試するとともに、地方適否を確めた結果、1964年(昭39)優良品種に決定し、「光小豆」と命名された。

- 特性概要**
1. 開花始、成熟期とも「宝小豆」なみか、1~2日おそい中生種である。
 2. 草丈はやや高く、開花期前後、気象条件がよければ蔓化することもある。
 3. 熟莢色は淡褐色で、莢は長く、太さ中位でやや湾曲する。
 4. 子実は小粒でやや烏帽子型を示し、種皮色はやや淡赤色で光沢がある。
 5. 子実収量は「宝小豆」より多収で、やや疎植(10a当り6,000株程度)で多収の傾向を示す。

栽培適地および奨励態度 全道一円に適するが、とくに冷涼な地帯はさける。

この品種は開花期前後の気象条件によっては蔓化の傾向を示すことがあるので地力の高い圃場においては密植栽培はさけるべきである。(1975年(昭50)廃止)

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10 a 当り		1,000粒重	試験年次
				草丈	分枝数	着莢数	子実重	総重		
十勝支場	7.27	9.19	117	66	3.9	43	202	370	112	1961~1963
上川支場	7.28	9.25	124	74	3.7	57	277	574	117	1962~1963
北見支場	8. 2	10.10	137	39	3.6	20	160	374	157	"
原原種農場	7.27	9.19	117	52	3.1	57	278	426	113	"

(2) 晩大納言 (十育62号)

来歴 「晩大納言」は、1960年(昭35)に北海道立農業試験場十勝支場において、「能登小豆」に「早生大粒1号」を交配し、選抜固定をはかって育成したものである。母親の「能登小豆」は1959年(昭34)に大阪市内の雑穀問屋より入手した能登産の来歴不明の大粒品種である。1967年(昭42)より「十育62号」の系統名で生産力検定試験に供試し、また、地方適否を確めた結果、1970年(昭45)、優良品種に決定し、「晩大納言」と命名された。なお、「寿小豆」、「アカネグイナゴン」は同じ組合せから育成されたものである。

特性概要 1.開花始は「早生大粒1号」より3日前後おそく、成熟期は5日ほど遅い中生種である。

2.草丈はやや高く、主茎節数、分枝数、莢数ともに「早生大粒1号」をうわまわる大粒の品種である。

3.熟莢は灰白色で太くて短かく、わずかに湾曲する。

4.子実は「早生大粒1号」、「アカネグイナゴン」より大きく、烏帽子型で、種皮色は濃赤色で光沢がある。

5.子実収量は「早生大粒1号」に比べて10%程度多収で、耐倒伏性も同品種にまさる。

栽培適地と奨励態度 本道中央部以南の比較的気象条件の恵まれた地帯に適す。

この品種は耐倒伏性が「早生大粒1号」よりやや強いので、栽植株数、施肥量をやや多くすることにより、より多収が期待できる。

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における				10 a 当り		1,000粒重	試験年次
				草丈	主茎節数	分枝数	着莢数	子実重	総重		
十勝農試	7.30	9.26	126	45	13	3.4	37	269	452	202	1967~1969
道南農試	7.27	9.21	132	93	-	3.0	48	302	607	161	1969
中央農試	7.28	9.26	132	67	-	3.9	36	281	556	186	1968~1969
原原種農場	7.25	9.28	139	66	-	4.1	42	359	577	201	"
上川農試	8. 2	(9.27)	-	76	-	4.6	38	242	~	210	1968~1969
北見農試	8. 2	未	-	59	-	4.4	20	78	468	201	1968

() 内は未成熟を除く

(3) 寿小豆 (中育1号)

来歴 「寿小豆」は、1960年(昭45)北海道立十勝農業試験場において「能登小豆」を母とし、「早生大粒1号」を父として交配をおこない、雑種第5代(昭40)から北海道立中央農業試験場において選抜固定をはかり育成したものである。1968年(昭43)より「中育1号」の系統名で生産力検定試験に供試するとともに地方適否を確かめた結果、1971年(昭46)優良品種に決定し、「寿小豆」と命名された。

特性概要 1.開花始は「宝小豆」よりやや早く、成熟期は道央では「宝小豆」より遅れるが、他の地域では「宝小豆」なみで中生種に属する。

2.草丈はやや高く、分枝数はやや少く、葉は円形であるが葉縁の左右にくびれがある。

3.熟莢色は褐色で、莢はやや太くて長く、やや湾曲する。

4.子実は中粒で形状は円筒形、種皮色は赤色である。

5.子実収量は「宝小豆」に比べて多収で、分枝数が少いので密植による増収性が高い。

6.立枯病に比較的強い。

栽培適地および奨励態度 道央ならびに道東北に適する。しかし、不安定地帯での栽培はさける。

この品種は分枝が少いため、密植による増収性は高いが、多肥による増収性は低いので施肥量は標準施肥量とし、栽植株数は多くする。

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10 a 当り		1,000粒重	試験年次
				草丈 cm	分枝数 本	着莢数 個	子実重 kg	総重 kg		
中央農試	7.24	9.18	124	54	2.6	30	270	527	137	1968~1970
十勝農試	7.26	9.23	123	53	3.1	35	278	435	158	"
上川農試	7.24	9.13	113	58	3.5	38	318	573	164	"
北見農試	7.26	(9.21)	-	48	2.0	28	200	443	178	"
原原種農場	7.22	9.14	123	52	2.4	34	293	527	153	"
道南農試	7.25	9.16	127	92	2.0	38	300	521	123	1969

() 内は未成熟を除く

(4) 栄小豆 (十育70号)

来歴 「栄小豆」は、1960年(昭35)に北海道立農業試験場十勝支場において「3407」(「茶殻早生」×「早生大粒1号」のF₆)を母とし「早生大粒1号」を父として交配を行い、以降選抜固定を続け育成したものである。1969年(昭44)より「十育70号」の系統名で生産力検定試験に供試するとともに地方適否を確かめた結果、1973年(昭48)優良品種に決定し、「栄小豆」と命名された。

特性概要 1.開花始、成熟期は「宝小豆」なみか、1~2日程度おそい中生種である。

2.草丈はやや高く、分枝数、莢数ともに「宝小豆」よりやや多い。

3.熟莢色は褐色で莢は長く、太さは中位でやや湾曲する。

4. 子実は「宝小豆」よりやや大きめの小粒で、形状は円筒形、種皮色は赤色である。

5. 子実収量は「宝小豆」より多収で、とくに不良気象条件下での減収割合が小さい。

栽培適地と奨励態度 十勝地方（山麓沿海で早生種栽培地帯はさける）および上川中・南部に適する。

草丈が高く、分枝数も多いため耐倒伏性が「宝小豆」よりやや劣るので、過度の密植はさけた方がよい。しかし、施肥反応が比較的高いので、施肥量をやや多めにすると多収が期待できる。

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10 a 当り		1,000粒重	試験年次
				草丈	分枝数	着莢数	子実重	総重		
十勝農試	7.29	(9.19)	(117)	49	4.0	40	277	443	136	1969~1972
上川農試	7.25	9.17	119	64	4.8	48	329	644	131	1970~1972
北見農試	8. 2	-	-	52	3.5	27	168	482	122	"
中央農試	7.29	9.16	118	31	2.2	30	141	226	107	"
原原種農場	7.23	9.12	114	28	4.3	36	255	461	117	"

注 () は1971年をのぞいた平均値

(5) アカネダイナゴン (十育69号)

来歴 「アカネダイナゴン」は、1960年(昭35)に北海道立農業試験場十勝支場において「能登小豆」を母とし「早生大粒1号」を父として交配し、選抜固定をはかって育成したもので、1969年(昭44)から「十育69号」の系統名で生産力検定試験に供試され、また、地方適否を確かめた結果、1974年(昭49)優良品種に決定し、農林省に新品種「アカネダイナゴン」(あずき農林1号)と命名、登録された。

特性概要 1. 開花始、成熟期は「早生大粒1号」よりやや遅く、「暁大納言」より早い中生種である。

2. 草丈は中位で「暁大納言」に比べて短かく、主茎節数は「早生大粒1号」より多く「暁大納言」なみである。

3. 熟莢色は灰白色で太くて短かく、わずかに湾曲する。

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10 a 当り		1,000粒重	試験年次
				草丈	分枝数	着莢数	子実重	総重		
十勝農試	7.28	(9.21)	(120)	41	3.8	47	293	478	184	1969~1973
北見農試	7.28	9.22	124	67	4.4	47	347	630	197	1972~1973
上川農試	7.28	9.25	127	65	4.5	49	328	700	175	1970~1973
原原種農場	7.24	9.14	117	34	4.2	36	247	423	174	"
中央農試	7.28	9.22	124	23	2.1	27	158	257	169	1970~1972

注 () 1971年をのぞいた値

4. 子実は六粒で形状は烏帽子型を呈し、種皮色は濃赤で光沢がある。
5. 子実収量は「早生大粒1号」に比べて多収で、不良気象条件下における収量は「暁大納言」にまさる。

栽培適地と奨励態度 十勝地方の中央部および上川の中・南部ならびに道央、道南地帯に適する。

この品種は耐倒伏性がやや強いので、やや施肥量を増加することにより、より多収が期待できる。また、分枝数がやや多く、後期に開花したものの粒肥大が良好であるから、極端な密植栽培はさけた方がよい。

(6) ハヤテショウズ (十育85号)

来歴 「ハヤテショウズ」は、1965年(昭40)に北海道立十勝農業試験場において「宝小豆」に「班小粒系-1」を交配し、選抜固定をはかって育成したものである。1970年(昭45)より「5082」の系統番号で、また、1971年(昭46)からは「十育85号」の系統名で生産力検定試験に供試するとともに、地方適否を確めた結果、1976年(昭51)優良品種に決定し、農林省に新品種「ハヤテショウズ」(あずき農林2号)と命名、登録された。

- 特性の概要 1. 開花始は「茶殻早生」より3日程早く、成熟期は2～3日おそい早生種である。
2. 草丈はやや低く、「茶殻早生」と「宝小豆」の中間で、葉は円形であるが生育後期やや剣先様となる。
3. 熟莢は褐色で、太さはやや細くて長く、先端はやや湾曲する。
4. 子実は小粒で形状は短円筒形、種皮色はやや濃赤である。
5. 子実収量は「茶殻早生」に比べて10%以上多収である。

栽培適地と奨励態度 十勝、網走および上川地方に適し、「茶殻早生」にかえると共に「宝小豆」の栽培が不安定な地帯では、これにかえて栽培し得る。

栽培は「茶殻早生」に準じてよいが、生育後期から収穫期の気象条件(特に多雨、長雨)によっては品質を低下させるので、適期収穫、適正な収納作業が必要である。また、多肥および密植に対する反応が「茶殻早生」より大きいので、増肥、密植化をはかることにより、より多収が期待できる。

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10a当り		1,000粒重	試験年次
				草丈	分枝数	着莢数	子実重	総重		
	月日	月日	日	cm	本	個	kg	kg	g	
十勝農試	7.25	9.13	112	38	2.5	48	281	408	114	1972~1975
上川農試	7.22	9.5	109	60	4.2	41	264	495	112	1973~1975
北見農試	7.28	9.19	120	53	3.6	43	298	488	120	"
原原種農場	7.21	9.5	109	30	2.0	33	184	300	106	"

10. 菜 豆

(1) 改良大手亡 (大手亡—清水)

来歴 「改良大手亡」の来歴は判然としないが、上川郡清水町の上野与四郎氏が栽培していたもの(道南から導入したという)を1953年(昭28)北海道立農業試験場十勝支場が取寄せた。その後同支場で不良個体の除去を行い、1955年(昭30)より「大手亡(清水)」の仮名称を付し生産力検定試験、1956年(昭31)より各種の試験を実施し、1961年(昭36)優良品種に決定し、「改良大手亡」と命名された。

特性概要 1. 葉、花、莢、草姿、等の特性は「大手亡」と同じである。

2. 「大手亡」に比較し、開花始は約2日、成熟期は7日前後遅い晩生種である。

3. 子実の形状、粒色ともに「大手亡」とほとんど同じであるが、粒大は1000粒重で約10%ほど重い。

4. 子実収量は「大手亡」に比べおおよそ10%ほど多収を示す。

5. 各種病害に対する抵抗性は「大手亡」とかわりなく、倒伏、雨湿の害等についてもほとんど同程度である。しかし、晩生種であるため初霜の早い地帯や生育が遅延した場合は霜害を受ける危険性がある。

6. 子実の外観的品質は「大手亡」に比べてややまざる。

栽培適地と奨励態度 本品種の栽培適地は、「大手亡」に準じ、上川、空知一円および十勝、網走の山麓地帯を除く内陸部で、「大手亡」に換えて栽培できる品種である。晩生種なため栽培に当っては、従来の「大手亡」のように6月に入ってからの播種では霜害の危険性がともなうので、できるだけ5月中旬に播種する必要があり、また生育のおくれる地帯あるいは初霜の早い地帯での栽培はとくに注意しなければならない。〔1975年(昭50)廃止〕

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10 a 当り		1,000粒重	試験年次
				草 丈	分枝数	着莢数	子実重	総 重		
十勝支場	7.23	9.21	119	123	4.9	17.0	209	450	326	1958~1961
北見支場	7.23	9.24	121	101	5.4	24.3	255	481	340	1959
上川支場	7.25	9.19	106	114	6.0	29.5	324	587	304	1960
原原種農場	7.20	9.17	113	113	4.8	37.3	291	509	335	"

(2) 改良中長 (中長鶉—上士幌)

来歴 「改良中長」は、1947年(昭22)頃河東郡音更町の農家国分氏が「中長鶉」より耐病性が強く多収とみられる数個体を選抜し、増殖したものである。その増殖種子が1953年(昭28)頃より上士幌町を中心に栽培され作付け面積が広がりつつあったが、1953年(昭28)上士幌町報恩の農家、下村菊治氏が本品種を種子更新用として入手し、さらに耐病性が強く、良質多収なものの選抜を繰返し増殖してきたものである。北海道立農業試験場十勝支場では1957(昭32)より「中長鶉(上士幌)」の仮名称で試験を開始し各種試験に供試した結果、1961年(昭36)優

良品種に決定し、「改良中長」と命名された。

- 特性概要 1. 一般性状の葉、花、莢、草姿、等の特性は「中長鶉」と同じである。
 2. 開花始は「中長鶉」とほとんど同じ、成熟期は1～2日早い中生の早に属する。
 3. 子実の形状、粒色ともに「中長鶉」と同じであるが、粒大はやや大きい。
 4. 子実収量は11%ほど「中長鶉」より多収を示す。
 5. 半蔓性であるため倒伏しやすいが、雨湿による変色粒の発現は「中長鶉」より少なく、菜豆炭そ病の被害も「中長鶉」に比べて少ない。
 6. 品質は良く「中長鶉」と同様、やや粉質で、食味は良好で、煮豆原料として好適である。

栽培適地と奨励態度 「改良中長」は特に冷涼な地帯を除く全道で栽培可能な品種であり、従来「中長鶉」に換えて栽培できる品種である。本品種は「中長鶉」と特性が類似しているの
 で、栽培に当たっての注意は「中長鶉」に準じて良い。(1975年(昭50)廃止)

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10a 当り		1,000粒重	試験年次
				草 丈	分枝数	着莢数	子実重	総 重		
十勝支場	7.16	9.4	102	111	5.8	13.9	174	335	479	1958～1960
北見支場	7.18	9.13	111	82	6.0	15.2	233	404	509	1959
上川支場	7.17	9.2	97	100	6.5	16.0	283	447	499	1960
原原種農場	7.13	9.10	106	81	0.6	19.1	157	288	514	1960

(3) 新金時 (十育B-1号)

来歴 「新金時」は、北海道立農業試験場十勝支場において1955年(昭30)に「紅金時」を母とし、「大正金時」を父として人工交配を行い、F₁を温室で養成し、F₂代以降ほ場にて育成選抜固定を図って来たものである。1959年(昭34)に「3405」、1960年(昭35)には「3405-A」の系統番号(仮)を付けて予備試験を行い、1961年(昭36)より「十育B-1号」の系統名で生産力検定試験に供試した。さらに1962年(昭37)からは特性検定試験を行うと共に、育成系統比較現地試験を行って地方適否を確かめ、1964年(昭39)優良品種に決定し、「新金時」と命名された。

- 特性概要 1. 草姿は矮性で草丈は「大正金時」よりやや高く、「紅金時」よりはやや低い、稚苗の莖色は極淡赤紫を呈し花色は淡紅色で硬莢である。
 2. 開花始は「大正金時」よりわずかに遅く、成熟期は「大正金時」に比し3～5日おくれる程度の早生種である。
 3. 子実の形状はやや長楕円であるが、大粒のため莢内で粒が接触し、子実の両端がやや角味を帯びる。粒大は「大正金時」より大きく1000粒重で8～10%程度重い、粒色は紅色である。
 4. 子実収量は「大正金時」より多く、播種期が多少遅れても減収程度は「大正金時」より少ない。
 5. 粒色が濃いため生育後期および収穫乾燥期における雨湿の害は「大正金時」より少なく、病害に対しては「大正金時」と同程度の反応を示す。
 6. 子実の品質は「大正金時」よりやや良好、肉質はやや粉質で、種皮は「大正金時」よりわず

かに厚く、煮くずれは少ない。煮上り時の色も良く、煮豆、甘納豆の原料に適する。

栽培適地と奨励態度 早生種であるため、栽培適地は「大正金時」に準じ特に寒冷な地帯を除く全道に適し、栽培に当っては大粒の特性を保持する意味から、特に地力の低いほ場および菜豆菌核病の多発ほ場は避けるべきである。〔1975年（昭50）廃止〕

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10 a 当り		1,000粒重	試験年次
				草丈	分枝数	着莢数	子実重	総重		
十勝支場	7.10	9.2	101	50	5.2	13.4	188	353	652	1961~1963
北見支場	7.16	9.17	114	45	5.9	14.5	199	431	699	1962~1963
上川支場	7.12	9.3	102	47	3.0	17.5	273	526	716	"
原原種農場	7.10	8.28	95	39	4.6	16.0	215	408	683	"

(4) 昭和金時（十育B—11号）

来歴 「昭和金時」は北海道立農業試験場十勝支場において1955年（昭30）に「紅金時」を母とし「大正金時」を父として人工交配を行い、大粒良質多収品種の育成を目標に選抜固定をはかって来たものである。1960年（昭35）に「3513」の系統番号で生産力検定予備試験を行い、1961年（昭37）より「十育B—11号」の系統名を付して生産力検定試験に供試した。さらに、1964年（昭39）からは特性検定試験を行うとともに現地試験を行って地方適否を確かめ、1966年（昭41）優良品種に決定し、「昭和金時」と命名された。

- 特性概要 1.草姿は矮性、草丈は「大正金時」「新金時」より高く、稚苗の茎色、花色などは「大正金時」「新金時」に類似する硬莢種である。
- 2.開花始は「大正金時」「新金時」より2~3日おそく、成熟期は「大正金時」に比し12~15日、「新金時」より10日前後おくれる中生種である。
- 3.子実の形状は長楕円で粒大は「大正金時」より大きく、1000粒重で「大正金時」に比し7~10%程重く、「新金時」よりやや重い。粒色は「大正金時」より濃くやや暗紅色を呈する。
- 4.子実収量は、道央の温暖な地帯では「大正金時」「新金時」と大差はないが、道東で気象条件に恵まれる地帯では「大正金時」より多収を示し、「新金時」よりも収量が多い。
- 5.各種病害に対しては「大正金時」とほぼ同程度の反応を示し、「新金時」と同様生育後期や収穫乾燥期における雨湿等による褪色粒の発生は少ない。

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10 a 当り		1,000粒重	試験年次
				草丈	分枝数	着莢数	子実重	総重		
十勝農試	7.14	9.15	115	49	4.0	12.0	202	359	728	1962~1965
北見農試	7.18	9.23	124	34	3.4	12.1	219	409	793	1964~1965
上川農試	7.15	9.18	111	53	3.3	15.6	303	624	772	"
中央農試	7.9	8.27	100	40	2.0	8.7	426	222	644	"
原原種農場	7.13	9.14	112	41	3.2	14.6	345	208	712	"

6. 子実の品質は「大正金時」に比しやや良好、種皮の厚さは「大正金時」よりややうすく、肉質はやや粘質であり、煮豆および甘納豆原料に適する。

栽培適地と奨励態度 栽培適地は十勝ならびに網走の中央部、上川など道東・道北の畑作地帯で「大正金時」の栽培地帯の中でもやや無霜期間の長い地帯に適する。栽培にあたっては「大正金時」に準じてよいが、大粒良質多収の特性を発揮させるために病害虫の発生が少なく、土地生産力の高いほ場を選ぶのが良い。又「大正金時」「新金時」に比し成熟期が10日以上も遅れるので秋播小麦の前作としての栽培には不適である。〔1978年（昭53）廃止〕

(5) 北原紅長（紅長2号）

来歴 「北原紅長」は中川郡幕別町の農家、北原政雄氏が1955年（昭30）に「大正金時」と「常富長鶉」を交互栽植して自然交雑を行わせて、「常富長鶉」より得た交雑種の中から1957年（昭32）以降選抜固定を図って来たものである。1960年（昭35）に2系統選抜し「紅長1号」、「紅長2号」の仮名称を付し、1961年（昭36）に2系統を北海道立農業試験場十勝支場に寄せられた。十勝支場では1961年（昭36）～1962年（昭37）に両系統を生産力検定予備試験に供試し、多収を示した「紅長2号」を1963年（昭38）以降生産力検定試験に供試するとともに固定度の調査を行い、さらに1964年（昭39）からは特性検定試験、現地試験に供試して地方適否を確かめ、1966年（昭41）優良品種に決定し、「北原紅長」と命名された。

特性概要 1. 草姿は矮性で、草丈は「大正金時」より高く、稚苗の莖色は淡赤紫、花色は淡紅色を呈する硬莢種である。

2. 開花始は「大正金時」「常富長鶉」とほぼ同じ、成熟期は「常富長鶉」と同じで「大正金時」より3～5日程度おくれる早生種である。

3. 形状は「常富長鶉」に類似する腎臓形を呈し、粒色は「大正金時」よりやや淡い赤紫、1000粒重は「大正金時」より軽く、「常富長鶉」と同じかやや重い。種皮の厚さは「大正金時」「常富長鶉」よりややうすく、種皮歩合は「常富長鶉」より低く「大正金時」とほとんど同じである。

4. 「大正金時」より多収を示し、「常富長鶉」に比較しても収量は多く、ことに土地生産力の低いところなど比較的不良条件下での栽培でも減収程度が少ない。

5. 菜豆炭そ病に対しては一般に「常富長鶉」より被害は少なく、他の病害に対しては「大正金時」「常富長鶉」と大差がない。しかし、成熟期から収穫期にかけての雨湿等による褪色粒の発生はやや多い。

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10a 当り		1,000粒重	試験年次
				草丈	分枝数	着莢数	子実重	総重		
十勝農試	7.13	9.8	108	45	3.9	12.6	212	384	633	1963～1965
北見農試	7.16	9.13	114	33	3.5	12.2	221	385	669	1964～1965
上川農試	7.15	9.6	106	52	2.1	17.8	265	494	697	"
中央農試	7.7	8.27	100	39	1.7	9.0	231	541	601	1965
原原種農場	7.11	8.31	99	42	3.8	14.5	184	298	639	1964～1965

6. 外見上の品質は「大正金時」「常富長鶉」と大差なく、煮熟した場合の肉質は粘質で、煮くずれがやや多くなる。

栽培適地と奨励態度 「北原紅長」の諸特性より栽培適地は「大正金時」あるいは「常富長鶉」に準ずるが、気象条件や土地条件に恵られない地帯において「常富長鶉」「大正金時」に配合して栽培する。

栽培にあたっては「常富長鶉」に準じてよいが、成熟期から収穫期にかけての雨湿等による褪色粒の発生に注意する必要がある。〔1975年（昭50）廃止〕

(6) 大正大手亡（大正大手亡）

来歴 「大正大手亡」の出所は明らかでないが、古くから河西郡札内村で栽培されていたもので、1955年（昭30）に帯広市幸福町の農家桑原俊一氏が、腐敗粒の発生が少なく、多収の本品種に注目して中札内の農家から種子を入手した。その後、桑原氏は小粒種の淘汰を続けて種子の増殖をはかったため漸次附近農家に広まった。本品種が帯広市幸福町を中心に普及しつつある段階で、大正農協から北海道立十勝農業試験場が特性等の調査を依頼され、1966年（昭41）より「大正大手亡」の仮名称をつけ生産力検定試験、特性検定試験などを行うと同時に、関係各農試の協力を得て地域性の検定を行い、1969年（昭44）優良品種に決定し、「大正大手亡」と命名された。

特性概要 1. 草姿は半蔓性で、草丈は「大手亡」とほぼ同じ、蔓の出る時期が「大手亡」よりおそく、複葉は「大手亡」よりやや大きく、花は白色である。分枝数、着莢数共に「大手亡」よりやや少なく、莢は比較的上位節に多く着く。

2. 開花始、成熟期共に「大手亡」とほぼ同じ中生種である。

3. 莢色は「大手亡」と同様、未熟莢は淡緑色で成熟前に暗紫色となり、熟莢は淡黄褐色を呈する。子種の形状は短楕円形であり、粒大は「大手亡」よりやや小さく、粒色は「大手亡」と同じく白色である。

4. 子実収量は道東畑作地帯で「大手亡」に比べ6～7%多収を示す。

5. 炭そ病、角斑病の被害は「大手亡」と差がなく、菌核病は「大手亡」「改良大手亡」よりやや少ない傾向を示す。倒伏は「大手亡」と大差ないが、着莢位置がやや高いため、倒伏時の腐敗粒の発生が少ない。

6. 外観的な品質は「大手亡」「改良大手亡」よりまさり、特に登熟期間中に雨湿の害の多い年に

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10a 当り		1,000粒重	試験年次
				草丈	分枝数	着莢数	子実重	総重		
	月日	月日	日	cm	本	個	kg	kg	kg	
十勝農試	7.23	9.15	115	114	2.1	15.4	180	332	312	1966～1968
北見農試	7.25	(9.29)	(133)	123	4.2	22.1	239	543	313	"
上川農試	7.21	9.14	112	98	2.7	26.4	286	578	305	"
中央農試	7.16	9.8	107	84	2.2	12.8	216	484	280	"
原原種農場	7.17	9.8	113	117	3.3	30.8	295	559	281	"

注 () は1967、1968の2ヶ年平均

は「大手亡」などより良質のものが生産される。種皮の厚さは「大手亡」「改良大手亡」よりややうすく、種皮歩合もやや低い。

栽培適地と奨励態度 熟期、草姿などの主要特性は「大手亡」に類似するが、上川、空知などの道央では多収を示していない。しかし、十勝、網走で多収を示し、良質なものが生産されるので、道東畑作地帯において「大手亡」に換えて奨励する。栽培は「大手亡」に準じて良いが、過度の密植、多肥栽培など特殊な栽培は避けるべきである。〔1975年（昭50）廃止〕

(7) 十勝白金時（十育E-6号）

来歴 「十勝白金時」は、北海道立農業試験場十勝支場で1958年（昭33）「大正白金時」を母とし、「白丸鴉」を父として人工交配を行ない、以後選抜固定をはかってきた。

1962年（昭37）から「3711」の系統番号で生産力検定予備試験に供試し、さらに1967年（昭42）以降は「十育E-6号」の系統名を付して生産力検定試験、特性検定試験を行うと共に、地域適応性検定試験ならびに現地試験に供試して適応性を確かめ、1970年（昭45）優良品種に決定し、「十勝白金時」と命名された。

特性概要 1. 主茎節数が12～13節で草丈が1m前後の半蔓性硬莢種で、上位節の複葉は小形になる。

2. 稚苗の莖色は緑で、花色は白、莢色は淡緑であり成熟すると黄白色となる。

3. 開花始は7月下旬、成熟期は9月中旬で、「大正白金時」より約10日遅い中生種である。

4. 子実はやや長楕円形で白色を呈し、大きさは「大正白金時」より大きく、1000粒重で10～15%重い。

5. 子実収量は「大正白金時」に比べ30～50%多収を示すが、過繁茂による倒伏や、菌核病の多発した場合には収量が低下する。

6. 子実の外観的品質は、「大正白金時」と大差がなく、種皮の厚さは0.086mmで「大正白金時」よりうすく、種皮歩合もやや低い。煮熟した場合の肉質はやや粉質で、粘度は「大正白金時」よりやや低く、食味が良く、煮豆、甘納豆原料および上質白あん原料に適する。

7. 低地温下で播種された場合には「大正白金時」より発芽率が低下する場合がある。炭そ病に強く、角斑病にもやや強い。

栽培適地と奨励態度 「十勝白金時」は十勝、網走、上川などの菜豆栽培地帯において「大正白金時」に替えて栽培可能な品種であるが「大正白金時」に比べ成熟期が約10日ほど遅い中生種であるため、特に無霜期間の短い地帯での栽培は避けるべきである。なお、低地温下で発芽が

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10a 当り		1,000粒重	試験年次
				草丈	分枝数	着莢数	子実重	総重		
十勝農試	7.20	9.13	112	93	3.8	15.0	243	400	701	1967～1969
北見農試	7.22	9.22	125	99	4.3	20.0	326	651	760	"
上川農試	7.19	9.7	107	88	3.4	21.7	188	381	635	"
中央農試	7.16	9.5	110	78	2.9	14.0	271	575	546	"
原原種農場	7.16	9.5	100	75	3.6	19.8	264	440	640	"

やや劣ることから、播種にあたっては必ず種子消毒を行ない、地温上昇が遅れた場合は播種期を多少遅らせるなどの注意が必要である。(1978年(昭53)廃止)

(8) 銀手亡(十育A-22号)

来歴 「銀手亡」は1960年(昭35)に大粒良質多収品種の育成を目標として、北海道立農業試験場十勝支場において「大手亡(網走)」を母とし、「大手亡(清水)」(改良大手亡)を父として人工交配を行い、F₁は温室で養成し、F₂以降はほ場に栽植し集団選抜を行い、F₃で個体選抜以後選抜固定をはかってきた。1967年(昭42)に「2015」の系統番号で生産力検定予備試験に供試し、1968年(昭43)からは「十育A-22号」の系統名を付して生産力検定試験を行った。また、1969年(昭44)からは特性検定試験を行うとともに、地域適応性検定試験ならびに現地試験に供試し地方適否を確かめ、1971年(昭46)優良品種に決定し、「銀手亡」と命名された。

特性概要 1.草丈は「大手亡」とほぼ同じ120cm程度の半蔓性硬莢種で、稚苗の茎色、花色、莢色などは「大手亡」に類似し、莢は扁平で莢幅は広い。

2.開花始、成熟期はともに「大手亡」に比べ1-2日早い中生種である。

3.子実の形状は「大手亡」よりやや長めで、「改良大手亡」と同じ楕円形を呈し、色は白色で、「大手亡」より大きく、1000粒重で10%程度重い。

4.着莢数は「大手亡」よりやや少ないが、莢内粒数が多く、粒大も大きいため、収量は10%前後多収を示す。

5.子実の外観的品質は「大手亡」より良好で種皮は「大手亡」よりうすく、種皮歩合も低い。また製あん歩留は「大手亡」に比べやや高い。

6.菜豆炭そ病、角斑病、菌核病などの被害は「大手亡」と大差なく、倒伏の状態も「大手亡」と同程度である。

栽培適地と奨励態度 「銀手亡」の栽培適地は主として十勝、網走、上川などの畑作地帯で、成熟期からみて現在「大手亡」が栽培されている地帯であればどこでも栽培可能である。また道央地帯においては「銀手亡」の多収性は多少低下するが、粒大、品質が良好であるため「大手亡」に替えて栽培しても良い。栽培は「大手亡」に準じて良いが、過度の密植あるいは多肥栽培は避けるべきであり、晩播による減収程度は比較的少ないが、子実の十分な肥大をはかるため播種期はおくらせない方が良い。

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10 a 当り		1,000粒重	試験年次
				草丈	分枝数	着莢数	子実重	総重		
十勝農試	7.21	9.17	116	123	3.5	17.0	223	404	387	1968~1970
北見農試	7.20	(9.10)	(113)	114	3.6	21.9	203	542	337	1969~1970
上川農試	7.24	9.22	121	106	3.6	26.6	285	682	364	"
中央農試	7.19	9.8	110	85	1.6	19.0	187	550	311	"
原原種農場	7.17	9.10	108	104	3.0	19.2	192	390	318	"

注 () 未成熟の年を除く

(9) 福粒中長 (十育D-7号)

来歴 「福粒中長」は、北海道立農業試験場十勝支場において、1960年(昭35)中長鶉種の大粒多収品種の育成を目的として「大正金時」を母とし、「中長鶉(上士幌)」(改良中長)を父として人工交配を行った。F₂~F₄は粒色、粒大子実収量などを対象に集団選抜し、F₅で個体選抜を行い、F₆以降は系統ならびに個体選抜を重ね固定をはかってきた。1967年(昭42)に予備選抜、1968年(昭43)は「十育D-7号」の系統名を付して生産力検定に供試した。1969年(昭44)以降は特性検定試験を行うと共に、地域適応性検定試験ならびに現地比較試験に供試し地方適否を確かめ、1972年(昭47)優良品種に決定し、「福粒中長」と命名された。

特性概要 1.草丈は約1m、主莖節数13節前後の半蔓性硬莢種で、稚苗の基色、花色、莢色等は「改良中長」に類似する。

2.開花始は「改良中長」とほぼ同じであるが、成熟期は「改良中長」より2~3日遅い中生種である。

3.子実の形状はやや長楕円形で、粒色は「改良中長」に類似するが斑紋色はやや濃い。粒大は「改良中長」よりまさり、1000粒重で約30%重い。

4.子実収量は着莢数が多いので「改良中長」より5~10%ほど多収を示す。しかし、密植晩播などの栽培条件下では着莢数の減少により減収することがある。

5.各種病害に対する反応は「改良中長」と差はなく、倒伏の程度も「改良中長」と大差がない。

6.子実の外観的品質は「改良中長」よりまさり、種皮は「改良中長」よりやや厚いが種皮歩合は低い。煮熟した場合の肉質は粉質で、食味も良好で煮豆に適する。

栽培適地と奨励態度 道央(上川、空知)道東(十勝、網走)の畑作地帯に適し、「改良中長」に換えて奨励する。栽培は「改良中長」に準じて良いが、過繁茂あるいは晩播による軟弱な生育は着莢数の減少を招くことがあるので避けるべきである。また、子実が大きいため脱穀時に子実の損傷をおこし易いので注意する必要がある。

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10a当り		1,000粒重	試験年次
				草丈	分枝数	着莢数	子実重	総重		
十勝農試	7.17	9.16	115	93	3.4	14.9	230	434	723	1968~1971
北見農試	7.16	9.15	118	90	2.8	16.5	252	590	705	1969~1970
上川農試	7.15	9.4	104	73	3.5	16.4	232	484	669	1969~1971
中央農試	7.15	9.5	106	53	2.3	13.0	166	423	635	"
原原種農場	7.14	9.4	98	71	3.5	15.2	218	422	605	"

(10) 福白金時 (十育E-10号)

来歴 「福白金時」は、1964年(昭39)北海道立十勝農業試験場において、早生矮性、大粒良質多収な白金時類の育成を目的とし、「十育B-11号」を母とし、「5823-C-B-4」を父として人工交配を行った。母親の「十育B-11号」は「紅金時」×「大正金時」の組合せにより育成された金時類で中生、矮性の多収、大粒、良質品種として1966年(昭41)優良品種「昭和

金時」となった系統である。父親の「5823-C-B-4」は「虎豆」に炭そ病抵抗性を付与する目的で「虎豆」×「大正白金時」から育成選抜した系統である。この組合せから選抜固定した系統に1969年（昭44）に「4201」、1970年（昭45）「十育E-10号」の系統名をつけ試験を行い、生産力、栽培条件に対する反応、地域性などについて検討した結果、1973年（昭48）優良品種に決定し、「福白金時」と命名された。

- 特性概要 1.「福白金時」の主茎節数は6節程度で矮性、硬莢種であり、草丈は45cm前後で「大正白金時」よりわずかに高いが、分枝数、着莢数などはほとんど差がない。
2. 稚苗の莖色、花色、莢色や子実の形状および粒色などの一般性状は「大正白金時」に類似する白金時種である。
3. 開花始は1日、成熟期は2日程度「大正白金時」より遅い早生種である。
4. 炭そ病に抵抗性を持ち、角斑病、菌核病などの被害および倒伏程度は「大正白金時」と差がない。
5. 子実は「大正白金時」に比べると19%多収を示すが、半蔓性で生育量の多い「十勝白金時」に比べると、子実収量が10%以上劣ることがある。
6. 子実の外観的品質は「大正白金時」に劣らないが臍部の周囲にある黄色の環と種皮の胎色網斑はわずかに濃く、煮熟すると不明になる。
7. 種皮は0.0846mmで「大正白金時」よりやややすく、種皮歩合も低い。煮熟した時の肉質は「大正白金時」と同様粘質であり、食味は良好で、煮豆、甘納豆の原料および上質白あん原料に通ずる。

栽培適地と奨励態度 「福白金時」は、十勝、網走、上川などの菜豆栽培地帯で「大正白金時」に換えて栽培出来る品種である。また「十勝白金時」の熟期や、半蔓性の栽培に支障がある場合はこれに代り得るものである。栽培は「大正白金時」に準ずるが、子実が大粒であるために脱穀時に子実の損傷をおこさないように注意する必要がある。

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10a 当り		1,000粒重	試験年次
				草丈	分枝数	着莢数	子実重	総重		
十勝農試	7.13	9.5	103	47	4.8	14.8	223	419	774	1970~1972
北見農試	7.20	(8.28)	(100)	50	4.5	15.8	257	620	821	1971~1972
上川農試	7.8	8.27	99	42	4.6	12.5	149	394	703	"
中央農試	7.15	8.28	97	34	4.9	13.0	170	381	749	"
原原種農場	7.13	8.31	93	36	3.5	12.4	175	365	706	"

注 () 内は1971年の成績を除く

(1) 姫手亡 (十育A-29号)

来歴

「姫手亡」は、手亡類の早生、短稈、良質多収を目標に1968年（昭43）北海道立十勝農業試験場で「十育A-19号」（「Sanilac Pea Bean」×「改良大手亡」）を母とし、「Improved White Navy」を父として人工交配を行い、以後固定選抜をはかってきたものである。1972年（昭47）に「十系A-6号」の系統名をつけ、生産力検定予備試験に供試した。1973年（昭48）「十育A-29

号」の系統名で、育成系統生産力検定試験、育成系統地域適応性検定試験を行うとともに、1974年（昭49）からは特性検定試験および育成系統比較現地試験を行い、生産力や栽培条件に対する反応、地域性について検討し、1976年（昭51）優良品種に決定し、「姫手亡」と命名された。

- 特性概要 1. 主茎節数が9～10節程度の蒴性硬莢種である。草丈は60cm前後で「銀手亡」（130～150cm）に比べ著しく低く、稚苗の莖色は緑、花色は白で「銀手亡」と変わらない。熟莢は「銀手亡」より小さく、分枝数や莢数は「銀手亡」より多い、
2. 開花始は「銀手亡」より1日遅く、成熟期は3日早い中生の早に属し、「銀手亡」に比べ子実重歩合が高い。
3. 炭そ病や菌核病などの耐病性は他の品種と変わらず、耐倒伏性は「銀手亡」より強い。
4. 低温条件下で莢数や莢内粒数の減少が比較的少なく、「銀手亡」に比べ子実重の減少割合が少ない。
5. 子実収量は「銀手亡」に比べ、粒大はやや劣るが、莢数が多いため16%程度多収を示し、「銀手亡」は莢がなく倒伏に強いことから、多肥栽培でより増収傾向を示す。
6. 子実の外観的品質は、「銀手亡」よりやや劣り、種皮の厚さは「銀手亡」よりうすく、種皮歩合が低い。煮熟したときの肉質は粉質で粘性は「銀手亡」より低い。

栽培適地と奨励態度 「姫手亡」の栽培適地は、十勝、網走、上川などの畑作地帯で、従来の「大手亡（芽室）」と全面的におきかえ得る品種であり、莢がなくピーンハーベスタの使用が容易なため、「銀手亡」ともかえ得る品種である。栽培は「銀手亡」に準じてよいが、倒伏に強いので施肥量をやや多くすることにより、多収が期待できる。晩播による減収割合は少ないが、適期に播種する方がよく、栽植密度は10アール当り8,300株（2本立）程度確保し、欠株を防止する。成熟後、刈り遅れると地面に接している莢が腐敗しやすくなるので早めに収穫するのがよい。各種病害に対しては従来の品種と同様に抵抗性がないので、適期に防除を行うよう注意する必要がある。

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10 a 当り		1,000粒重	試験年次
				草丈	分枝数	着莢数	子実重	総重		
	月日	月日	日	cm	本	個	kg	kg	g	
十勝農試	7.23	9.15	113	58	6.6	28.8	301	489	320	1973～1975
北見農試	7.23	9.13	113	60	7.1	28.2	312	564	349	1973～1974
上川農試	7.16	8.31	104	51	5.1	22.7	248	548	310	"
中央農試	7.15	8.31	102	39	4.2	21.8	235	527	289	"
原原種農場	7.13	8.27	99	34	3.7	20.5	171	328	283	"

(12) 改良虎豆（中育T11号）

来歴 「改良虎豆」は、1969年（昭44）北海道立中央農業試験場が、胆振、後志、北見、石狩地方より収集した虎豆在来種のうち、胆振支庁洞爺村産のものから、分離固定をおこなって育成したものである。1974年（昭49）から「中育T11号」の系統名で地域適応性検定試験、現地試験に供試して地方適否を確かめ、1977年（昭52）優良品種に決定し、「改良虎豆」と命名された。

特性概要 1. 一般性状 「虎豆」に類似し、草丈は約3m、主茎節数は30節程度のまん性の半硬

莢種で、幼莖の色は淡緑、葉は広く極淡緑で、しわがなく平滑である。

2.開花期および成熟期 開花期は7月中旬～下旬、成熟期は9月下旬～10月上旬で「虎豆」と同じく晩生種に属する。

3.子実 「虎豆」と同様に、形状は稍長めの球形である。色は白地に臍の周囲だけ淡肉色地に赤褐色の斑紋がある。粒大はほぼ「虎豆」と等しく大粒である。

4.収量性 「虎豆」にくらべて一莢内粒数はやや少ないが、着莢数が多く、15～20%多収である。

5.耐病性 「虎豆」同様に炭そ病、輪紋病にやや弱く、菌核病、黄化病、インゲンモザイク病には弱い、角斑病にはやや強い。

6.品質 外観品質、種皮の厚さ、種皮歩合とも「虎豆」と大差なく、煮熟した場合の煮崩れが少なく、肉質は粉質で食味は良好であり、主として煮豆の原料に適する。

栽培適地と奨励態度 胆振地方を中心とした道央部に適し、従来の品種「虎豆」におきかえて奨励する。

試験場所	開花期	成熟期	成熟期における			10a当り		1,000粒重	試験年次
			草丈	分枝数	着莢数	子実重	総重		
中央農試	月日 7.19	月日 (9.29)	cm 338	本 3.0	個 33.7	kg 225	kg (613)	g 732	1973～1976
北見農試	7.22*	(9.24) 達せず	300	—	37.1	247	498	718	1974～1975
虻田町	7.21*	9.27	295	—	38.2	179	403	751	1974～1976
壮瞥町	7.10*	9.27	281	—	44.8	257	—	745	1976

注 ・北見農試、虻田町、壮瞥町の開花期の項は開花始である。

成熟期の () 内は1973年の成績を除く

総重 () 内は1975、1976年の成績

<花 豆>

(13) 大白花 (中育M5号)

来歴 「大白花」は、1969年(昭44)北海道立中央農業試験場が、胆振、後志、北見地方より収集した白花豆在来種のうち、胆振支庁壮瞥町産のものから系統分離法(系統集団選抜法)により選抜、育成した。1974(昭49)から「中育M5号」の系統名で地域適応検定試験、現地試験に供試して地方適否を確かめ、1976年(昭51)優良品種に決定し、「大白花」と命名された。

特性概要 1.一般性状 草丈は約3m、主莖節数が30節程度のつる性の硬莢種で、幼莖の色は緑、花色は白で莢は大、莢色は褐色である。

2.開花期および成熟期 開花期は7月中旬、成熟期は9月下旬で、年によっては成熟期に達し

試験場所	開花期	成熟期	成熟期における			10a当り		1,000粒重	試験年次
			草丈	分枝数	着莢数	子実重	総重		
中央農試	月日 7.16	月日 (9.20) 達せず	cm 322	本 3.3	個 27.8	kg 273	kg 578	g 1,583	1973～1975
北見農試	7.19	達せず	309	—	26.1	319	827	1,753	1974～1975
虻田町	7.13*	9.25	290	—	40.1	324	657	1,667	"
壮瞥町	7.4*	9.20	360	—	44.3	289	—	1,680	1975

注 ・虻田町、壮瞥町の開花期の項は開花始である。

成熟期の () 内は1974年を除く

ないこともあるが、胆振地方では9月下旬に成熟期に達する。

3. 子実 形状はじん臓形で粒色は白である。粒大はきわめて大きく、1000粒重でほぼ1600gに近い。

4. 収量 多収であり、10a当り250kgから300kg前後の収量を示す。

5. 耐病性 在米種の白花豆同様、菌核病には弱い、炭そ病、輪紋病、角斑病、インゲンモザイク病などに対しては強い。

6. 品質 種皮の厚さは0.175mmで、普通菜豆より厚く、種皮歩合も8.8%でやや高いが、煮熟した場合の煮崩れが少なく、肉質は粉質で食味は良好である。煮豆、甘納豆の原料に適する。

栽培適地と奨励態度 胆振地方を中心とした道央部および北見周辺の畑作地帯に適し、在来の白花豆と全面的におき換えて奨励する。

11. えん豆

(1) 小緑（十育14号）

来歴 「小緑」は、1964年（昭39）北海道立十勝農業試験場で「アラスカ」を母とし「グリーンピース」を父として人工交配を行い、 $F_2 \sim F_3$ 世代は集団選抜、 F_4 以降で個体並びに系統選抜を行って固定をはかったものである。1962年（昭37）には、「5603—25」の系統番号で、また1963年（昭38）からは「十育14号」の系統名をつけて、生産力検定試験および特性検定試験を行うとともに、育成系統比較現地試験を行って地方適否を確かめ、1965年（昭40）優良品種に決定し、「小緑」と命名された。

特性概要 1. 草姿は矮性で、草丈は「改良青手無」に比較して40cm内外、「アラスカ」に比し50～60cm低い。

2. 托葉および小葉は「改良青手無」よりも小さくやや濃緑色を呈し、莢は小型で短かく「アラスカ」に類似するが、嫩莢色は「アラスカ」よりもやや濃い。熟莢は微黄色を呈する硬莢種である。

3. 子実の形状は球形で、粒大が「アラスカ」よりやや小粒の緑色種で、小皺がなく平滑である。

4. 開花始は「改良青手無」より僅かに遅いか同程度で、「アラスカ」に比し約2週間ほど遅く、成熟期は「改良青手無」と同程度か僅かに早く、「アラスカ」より10日前後遅い晩生種である。

5. 着莢はきわめて多く、多収である。各地で「改良青手無」に比し23～31%の多収を示している。

6. 草丈が低いいため、倒伏の程度は少なく、倒伏する時期も遅いので、腐敗粒の発生は「改良青手無」より少ない。

7. 立枯性病害に対しては「アラスカ」より強い。

8. 品質は、褪色粒が少なく、粒揃いがきわめてよく、小粒種の「アラスカ」に比べて良好である。

9. 戻しグリーンピースとしての缶詰適性は、腹割れ、染色などの点で「アラスカ」「改良青手無（篩下）」に遜色ない。

栽培適地と奨励態度 道内の青えん豆の栽培地域の全域で、缶詰原料としての「アラスカ」に

代えて栽培する。栽培法は「改良青手無」に準ずればよいが、矮性種なのでとくに生産力の低い圃場ではやや密植にして多収が期待できる。また開花より成熟までの期間が「改良青手無」より短いので、適期収穫に留意する。

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10a 当り		1,000粒重	試験年次
				草丈	分枝数	着莢数	子実重	総重		
十勝農試	月日 6.24	月日 8.4	日 100	cm 73.0	本 3.4	個 38.3	kg 246	kg 511	g 186	1962~1964
北見農試	7.2	8.11	88	67.3	—	33.7	225	453	136	1963~1964
上川農試	6.26	8.2	92	83.3	—	43.3	304	668	219	"
原原種農場	6.26	—	—	84.1	—	53.1	330	680	179	1964

(2) 大緑 (北育37号)

来歴 「大緑」は、1963年(昭38)北海道立農業試験場十勝支場で、大粒、良質、多収を目的として、「十育11号」を母とし、「6202」(「アンダーマン」×「5601-125」)のF₁を父として人工交配を行った。交配後、F₂以降は北海道立北見農業試験場に移してF₄まで集団選抜、F₅で個体選抜を行い、F₆以降、系統の選抜固定をはかってきたものである。1970年(昭45)に「北系6号」、1971年(昭41)からは「北育37号」の系統名を付して生産力検定試験を行うとともに、地域適応性検定試験ならびに現地試験に供試して、地方適否を確かめ、1975年(昭50)に優良品種に決定し、「大緑」と命名された。

特性概要 1.「改良青手無」に比し、主茎節数がやや少なく、草丈もやや低い半蔓性の硬莢種である。葉や莢は「改良青手無」よりやや大きい。

2.一莢内粒数は「改良青手無」より約40%多く、子実の形状は「改良青手無」に類似し、粒色は「改良青手無」より緑色がやや濃い。

3.1000粒重は「改良青手無」より15~20%重い大粒種である。

4.開花始、成熟期は「改良青手無」と同じか1~2日遅れる程度の晩生種である。

5.子実収量は「改良青手無」より15~20%多収である。しかし粒大が十分確保されない条件下では、「改育青手無」並みかそれより劣る場合もある。

6.倒伏は「改良青手無」並みで、腐敗粒の発生はやや多い。しかし子実の褪色粒の発現が少なく、外観品質は「改良青手無」とほぼ同じである。

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10a 当り		1,000粒重	試験年次
				草丈	分枝数	着莢数	子実重	総重		
北見農試	月日 6.30	月日 8.11	日 105	cm 99	本 2.2	個 25.0	kg 231	kg 587	g 367	1971~1974
中央農試	7.2	8.10	99	72	2.3	20.7	177	423	368	1971~1973
原原種農場	6.26	8.3	96	75	1.7	21.9	198	404	392	1971~1974
上川農試	7.1	8.3	89	67	1.8	24.6	197	450	373	"
十勝農試	6.26	8.5	103	96	1.7	20.8	180	507	360	"

7. 細菌性の病害に対して「改良青手無」より被害が多い（品種決定後に判明）。
8. 加工適性（煮豆、甘納豆、煎豆、あん）は「改良青手無」とほとんど差がない。

栽培適地と奨励態度 主として網走および上川、十勝の青えん豆栽培地帯に適する。

粒大が十分確保されない条件では多収性が発揮されないため、土地生産力の低い地帯、あるいは夏期に干ばつなどの起きやすい地域での栽培を避ける。なお過度の密植や、多肥あるいは遅播き栽培は倒伏を多発し、腐敗粒を多くするので避ける。

(3) 北海赤花（北育B—2号）

来歴 「北海赤花」は、1964年（昭39）北海道立十勝農業試験場で、短稈、赤えん豆良質・多収を目標として、「十育16号」（「アラスカ」×「グリーンピース」）を母に、在来種の赤えん豆（中札内）を父として人工交配し、F₁以降北海道立北見農業試験場で集団育種法により育成した。F₂~F₄世代は集団養成し、F₅世代で個体選抜を行い、F₆世代以降、系統の選抜固定をはかってきた。1973年（昭48）に「8103」の系統番号で生産力検定予備試験、1974年（昭49）からは「北育B—2号」の系統名を付して生産力検定試験、また1975年（昭50）からは各農試において地域適応性検定試験、および現地試験を行い、赤えん豆の主産地における地方適否を確かめた。1978年（昭53）優良品種に決定し、「北海赤花」と命名された。

- 特性概要 1. 草丈は80cm前後の矮性種で「在来種（南富良野）」よりもやや低い。茎は細く、節間が短かく、下位節よりの分枝が多い。
2. 子葉は淡黄色、葉は淡緑色でやや小さく、若茎色および葉身基部、花梗の一部は紫赤色を帯びる。
3. 1莢内粒数は、「在来種（南富良野）」より多く、子実は帯緑褐色地に赤褐色の斑紋がある赤えん豆で、扁球（不整形）で大きな皺があるが「在来種（南富良野）」よりやや少ない。
4. 1000粒重は280g前後の中粒種で「在来種（南富良野）」よりわずかに軽い。
5. 開花始は7月上旬で、「在来種（南富良野）」並みである。熟期は晩生種に属するが、「在来種（南富良野）」より2日程度早い。
6. 収量は、「在来種（南富良野）」に比し、育成地で8%、他の試験機関では21~38%多収である。
7. 草丈が低いことから倒伏する時期がやや遅れ、腐敗粒の発生は少ないが、成熟枯凋後の茎が「在来種」よりやや軟かい。
8. 外観品質は「在来種（南富良野）」並みであるが、皺がやや少なく、種皮はやや薄く吸水が早

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10a当り		1,000粒重	層豆歩合	試験年次
				草丈	分枝数	着莢数	子実重	総重			
北見農試	月日 7. 6	月日 8.14	日 101	cm 88	本 6.1	個 37	kg 251	kg 533	g 279	% 8.8	1974~ 1977
上川農試	6.30	8. 1	80	60	6.7	34	280	549	257	4.2	1975~ 1977
十勝農試	6.29	8. 3	102	98	4.8	36	259	580	236	2.8	"
中央農試	6.25	8. 5	90	101	7.0	26	134	438	276	11.2	1975
原原種農場	6.23	8. 1	99	74	6.5	31	229	500	283	6.0	"

い。

栽培適地と奨励態度 全道の畑作地帯に適し、赤えん豆「在来種」と全面的におきかえて栽培する。栽培法は「在来種」に準じてよいが、成熟枯凋後の茎が「在来種」よりやや軟かい特性から、適期収穫を励行すべきである。

12. 馬鈴しょ

(1) エニワ (北海22号)

来歴 「エニワ」は、1952年(昭27)北海道農業試験場(作物部普通作物第四研究室)において、「島系267号」を母、「島系232号」を父として、人工交配を行い、1953年(昭28)実生を養成し、同地で選抜を重ねてきた。1958年(昭33)「北海22号」の系統名をつけ、関係道府県へ配付して生産力及び地方適否を試験した。1961年(昭36)優良品種に決定し、農林省に新品種「エニワ」(ばれいしょ農林12号)と命名、登録された。

特性概要 1. 草丈は「紅丸」程度で、よく繁茂する。

2. 茎は太くなく、茎数は少ないが、分枝や側枝の発生はやや多い。茎には着色がみられず、茎翼は直であり、葉色はやや濃い。

3. いもの形状は偏円形で、いもの皮色は淡かっ色で、全面ラゼット状を呈する。

4. いもは中、大粒が多く、粒ぞろいがよい。目は浅く、目の数は中ぐらい、肉色は白い。蒸しいもは粉質で、食味はよい。ただし、中心空洞ができやすく、かっ色心腐も多いので、食用には適さない。

5. 花は白色で、その数は中ぐらい。開花期間は長いほうである。

6. 熟期は「農林1号」程度である。

7. 収量は「農林1号」と大差ない。肥沃地においてよい成績を示す。

8. でん粉歩留りは「農林1号」より1-2%高く、でん粉原料用に適している。

9. 疫病には強く、R₁遺伝子を保有している。

10. 比較的冷涼な気候に適し、高温乾燥には弱い。

11. 休眠は長い。

栽培適地と奨励態度 北海道一円に適し、排水のよい肥沃地に好適する。二次生長の発生が多いところにも適合する。

試験場名	茎葉枯凋期	茎長	10a 当り		上 い も 平均1個重	でん粉価	試験年次
			上いも重	でん粉重			
北海道農試 (島松研究室)	月. 日 9.12	cm 78	kg 2,911	kg 506	g 102	% 18.4	1957~ 1960
同 (紋別研究室)	9.16	64	2,488	478	(86)	20.1	1958~ 1960
上川支場 (士別試験地)	9.26	87	3,677	705	(103)	20.2	"
北見支場	9.22	91	3,489	658	(113)	19.7	"
十勝支場	9.13	72	3,439	676	96	18.8	"